

戦前・南洋の日本人町を歩く

第二部 マニラ日本人町の先駆者たち(下)

作家
太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作から昭和史を発掘するノンフィクションまで、幅広く執筆。最新刊は『尾崎秀実とソルゲ事件』。

支倉一行の足跡を歩く

深い藍色をした南国の空の下につづく白壁の家々の出窓には、色とりどりの花が咲き乱れている。時おり近くの教会と大聖堂の鐘の音が流れる石畳を、馬車がゆっくりと通り過ぎていった。

通りを素早く横切っていく褐色の肌の子供たち、祭りにでも出かけるのか笑顔にあふれ、思い切り着飾った娘たちが行き交う様子は、異邦人の私には、心温まる光景であった。

スペイン統治時代の面影を残す、ここマニラ旧市街のイントラムロス界隈は、スペインが第二の故郷の私

には、懐かしい心持ちにさせてくれる街である。

前号でも触れたように、当地は四百年前、伊達政宗からスペイン、ローマに遣わされた支倉常長一行が日本への帰途、一六一八年六月から二〇年八月まで、二年あまり滞在していた地でもある。

仙台を発つたのち、スペインでは国王フェリペ三世に国交樹立を持ちかけ、ローマのヴァチカン宮殿では法王パウロ五世に謁見して、スペインとの外交交渉のお墨付きを請願した「慶長遣欧使節」に関する書物は、すでに数多く世に出ている。

よく知られているように、その後彼らは、再びメキシコを経由して日本への帰途、往路と同じ仙台藩のサン・ファン・パウティスタ（洗礼者ヨハネ）号に乗船し

てアカプルコからいったん南に下がり、貿易風に乗って西に向かい、ルソンのマニラにやってきたのである。だが、支倉一行十一人のほかに、支倉家の下男数人がマニラに滞在していたことはわかっている、彼らのマニラでの生活に触れた書物はまだ一冊もない。



旧日本人町ディラオの終着点にあるマニラ市庁舎

では、誰と誰がマニラにいたかについては、伊達家の史料『貞山公治家記録』に名を連ねた帰国者名簿で、十一名の名前が特定できる。記録された十一名とは、大使支倉常長を筆頭に今泉令史、西九助、田中太郎右衛門、内藤半十郎のほかに、苗字は不明だが、九右衛門、内蔵丞、主殿、吉内、久次、金蔵のことである。十一名のうち、苗字のわからない者が六名いるが、内蔵丞と主殿は名前からして、身分は武士に違いない。

さらに、この名簿では支倉が筆頭にきていることから、仙台藩の中での身分、ないし使節の中での地位の順序になっていると考えられる。したがって、名簿の順序にこだわると、九右衛門は内蔵丞、主殿の前にきているので、彼も侍ということになる。

ではヨーロッパからの帰途、鎖国で閉ざされた日本に帰る機会をマニラで待っていた二年間、いったい彼らはどんな生活をしていただろうか。

まず彼らがいた場所を特定する必要があるが、カギを握っているのは、支倉一行と縁の深い聖フランシスコ会の教会や修道会、礼拝堂などの在所である。ヨーロッパで受洗して以来、朝夕深い祈りを捧げるのが日課になっていた上に、所持金のない彼らは、旅の行く